Press Release

報道用資料
2006年11月

The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama
神奈川県立近代美術館

時代と美術の多面体

―近代の成立期に光をあてて―

Aspects of Modern Art in Japan

会　　期：2006年1月13日(土)～3月25日(日)
休 館 日：月曜日(ただし2月12日は開館)、祝日の翌日(2月13日(火)、3月22日(木))
開館時間：午前9時30分～午後5時 (入場は午後4時30分まで)
観 覧 料：一般1000(900)円　20歳未満・学生850(750)円　65歳以上500円
　　(　)内は20名以上の団体料金です。高校生以下の方、障害者の方は無料です。
会　　場：神奈川県立近代美術館 葉山
　　〒240-0111 神奈川県三浦郡葉山町一色2208-1　tel.046-875-2800
主　　催：神奈川県立近代美術館

美術の流れを見ると、そしてひとつひとつの作品をじっくり見ていくと、そこからはさまざまな事柄が浮かびだしてきます。作品そのものを味わい、また作家の考えや生き方に共感する享受の仕方のほかにも、美術の楽しみは多様に広がっているものです。

この展覧会「時代と美術の多面体―近代の成立期に光をあてて―」は、作品を透かして見えてくる時代の容貌、他の芸術分野と美術との関わり、さらには作品にこめられた作家の思いなど、作品が語りかけることに耳を傾けながら、いくつかの切り口をもうけて時代と美術が織りなす相を観察していこうとの意図の元に構想されています。また書籍資料や解説なども加えて、近代という時代と美術とがどういう絡み合いを見せ、どんな断面を輝かせているかを楽しもうというものです。その切り口として、8つのテーマを立て、主として明治末から昭和始めにかけての日本近代の成立期を中心に、美術に表われた多彩な諸相をうかがいます。

■ギャラリー・トーク　2月21日(水)、3月20日(火)　午後2時～2時30分

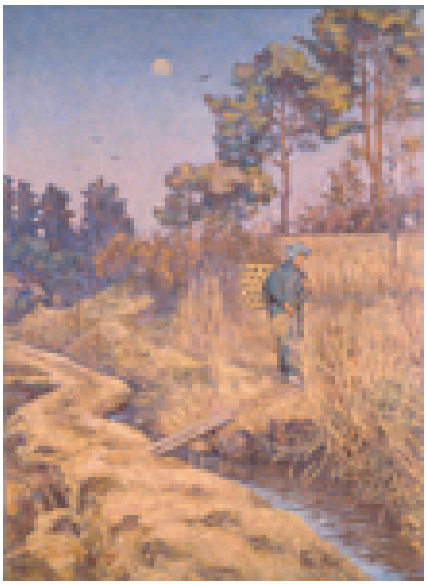
■時代と美術の多面体展　開催記念座談会　1月14日(日)　午後2時～4時
鼎談　青木茂(文星芸術大学教授)
　　佐藤道信(東京藝術大学助教授)
　　山梨俊夫(神奈川県立近代美術館長)

美術館ホームページに掲載される下記のプレス情報をご覧下さい。
http://www.moma.pref.kanagawa.jp/museum/press/2006r_tamentai.pdf

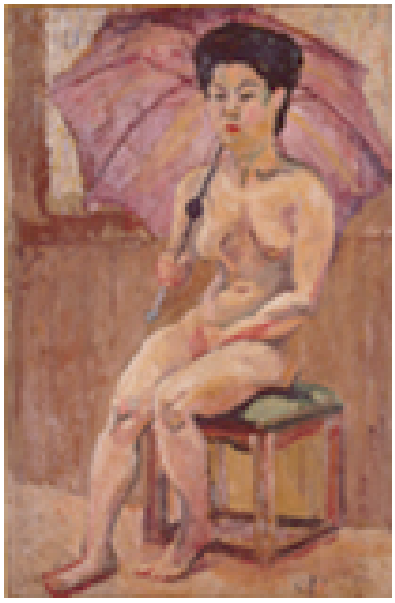
お問い合わせ先　神奈川県立近代美術館 葉山　〒240-0111 神奈川県三浦郡葉山町一色2208-1
tel.046-875-2800 / fax.046-875-2968　広報担当：忌部　展覧会担当：是枝・籾山
http://www.moma.pref.kanagawa.jp/museum/

第1章：技法、材料から見た近代日本の油絵

高橋由一らの洋画開拓、松岡壽らの明治初期のヨーロッパ留学者、黒田清輝ら中期の留学者による本格的な油彩画技法の輸入といった、幕末期から明治時代にかけての洋風表現を脱して油彩技術に親しんでいく時期に焦点を絞り、技法上の変化をたどりながら、技法を支える絵画観の変遷を合わせて考えます。



1. 久米圭一郎《秋景》1895年 久米美術館蔵



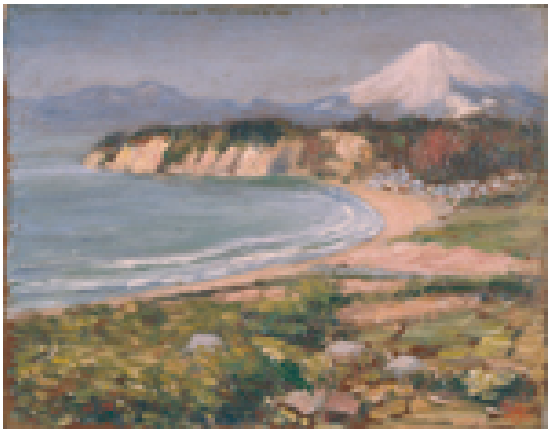
第２章：人体表現—萬鉄五郎《日傘の裸婦》をきっかけとして

生身の存在としての裸体表現に明らかなように人体の捉え方が大きく変化した大正期、萬鉄五郎を中心に人体表現の変化にどのような視点、考え方がこめられていたかを解き明かそうと試みます。

2. 萬鉄五郎《日傘の裸婦》1913年 当館蔵

第３章：富士の変容—名山から日本の象徴へ

富士山は「日本」を象徴する山と誰もが思う。しかし桜も富士山も日本のシンボルになったのは、日本国家のイメージ造りという半ば意識的な操作によるものでした。整った山容と天空に抜きんでる高さをもつ独立峰富士山は、遠い昔から山岳信仰の聖地として、また名山として人口に膾炙し、旅人たちに愛されました。富士がよく見える場所は名所となり、近代に入ると登山家たちの憧れの対象とも見られ、ナショナリズムの高まりとともにやがて日本のシンボルとなっていきます。その変遷の過程に生まれた富士の絵画をたどり、富士の役割の変容をうかがいます。



3. 黒田清輝《風景(富士遠望)》制作年不詳
東京文化財研究所蔵

第４章：静物—断片という全体

静物画、とくに里見勝蔵の静物画を取り上げ、造形上の問題として、画面に描かれた断片と全体の関係を見ていきます。特定の作品と関連作、あるいは作家同士の相互的な関わりを扱いながら、里見勝蔵の静物画とその系譜に沿って、造形的な構造の分析とその時代について考察します。

4. 里見勝蔵《マネキンの静物》1930年 静岡県立美術館蔵

第５章：都会のモンタージュ

近代化の展開につれて、東京を中心に都市化が進行する。都会は、きらびやかな近代の文化が発散するところであり、ときに悲哀を帯びた憂愁を漂わせます。そこに生きる画家たちの眼には、さまざまなイメージが折り重なり複合して、近代の象徴としての都市像が育てられる。松本竣介のモンタージュ絵画、いくつかの写真などによって、近代のイメージの温床である都市を考えます。

5. 河辺昌久《作品A》1925年頃 板橋区立美術館蔵

第６章：見出された青春像

明治時代末から大正時代、近代的精神が日本に根付き、いわゆる近代の自我が目覚めるとともに、成長に伴う悩みや生きることの意味を問う思春期、青春期が改めて発見されていきます。それまでには描かれなかった青春期がどう見られ、青春期の渦中にあった画家たちの視点がどんなものであったかを観察します。

6. 斉藤与里《春》1918年 兵庫県立美術館蔵

第７章：東アジアへの眼

画家たちは、中国大陸、朝鮮半島、台湾、東南アジアなどを旅した。とりわけ大正時代以降、植民地政策と絡んで船便、飛行機便が活発になるにつれて画家の旅も、頻度を増しました。彼らは、時代の影響を映しつつも個人的な視点をもって、異文化の光景、風俗、目新しい風景を、新鮮な喜びとして描いていきました。岸田劉生の大連風景から兵士として従軍を余儀なくされた画家の戦争の影を宿す絵画までをもって、東アジアがどう捉えられていたかを探ります。

7. 安井曾太郎《永徳の喇嘛廟》1937年
財団法人永青文庫蔵

第８章：モダニズムの詩と造形

大正時代から昭和の始めにかけて、言語の自律性に支えられて新たな時代の感性を歌い上げるモダニズム詩が若い世代のあいだで盛んに書かれた。古賀春江、三岸好太郎らは、そうした詩を書くとともに、一方で同質のイメージを絵画に託した。近代性が花開いた時代の息吹を、彼らの詩と絵画を通してたどっていきます。

8. 古賀春江《煙火》1927年 川端康成記念会蔵